

8 D. H. ロレンス

D. H. ロレンス (D. H. Lawrence, 1885-1930) は1885年9月11日にイングランド中部ノッティンガムシャー郊外のイーストウッドに生まれた。父親は炭鉱の請負人のアーサー、母親は貧しい労働者階級の出身で元学校教師のリディアであった。炭鉱町のイーストウッドでの生活は、当然のことながらロレンス作品に大きな影響を与えているが、同時に、故郷を離れ英国すらも捨て、終生世界を放浪する運命にあるロレンスにとって、故郷はいわば相対化されることになる。ロレンスは故郷の影響を決定的に受けているのと同時に、それを断ち切り、独自の世界観と思想を構築する。このような20世紀の作家特有のアンビヴァレントな態度は、当然のことながらロレンスにも備わっていた。

慢性的な肺炎の病気を抱えながら、1908年には大学で教員資格を取得して、ロンドン南部のルロイドンにある小学校に赴任し3年半働いた。その期間中1909年には『イングリッシュ・レビュー』誌に送った数編の詩が掲載され、職業作家としてデビューを果たした。1910年には母親のリディアが亡くなる。母の死に対する複雑な思いは、代表作の一つである長編小説『息子と恋人』(*Sons and Lovers*, 1913) や詩集『愛』(*Love*, 1916) に収められた『悲しみ』(*Sorrow*) など多くの作品で扱われている。1911年には若々しい澁刺とした息吹にあふれ後のロレンス小説の萌芽となる処女長編小説『白孔雀』(*The White Peacock*, 1911) が出版される。

1912年、ロレンスはノッティンガム大学の教授夫人のフリーダとドイツに駆け落ちをする。この時期のフリーダに対する激しい恋愛は、詩集『愛の詩その他』(*Love Poems and Others*, 1913) に収められた『ヘネフにて』(*Bei Hennef*) に現れている。彼は地方の労働者階級出身にもかかわらず、この時期に著名な文人たちや知識人たちと交流を持てるようになった。ジョン・ミドルトン・マリ (John Middleton Murry, 1889-1957)、キャサリン・マンズフィールド (Katherine Mansfield, 1888-1923)、バートランド・ラッセル (Bertrand Arthur William Russell, 1872-1970)、E. M. フォースター (E. M. Forster, 1879-1970)、貴族のオットリン・モレル (Ottoline Morrell, 1873-1938)、首相経験者のハーバート・アスキス (Herbert Henry Asquith, 1852-1928) などとの交際は、作家として英国社会の中枢に関わるきっかけを作った。

第一次世界大戦が始まり、妻のフリーダはドイツ人であるために様々な迫害を受けるようになる。さらに、1915年に長編『虹』が「猥褻印刷物取締法」に抵触す

るとして当局により発禁処分を受ける。それらがきっかけとなって、彼らは戦後すぐに英国を離れ、イタリアをはじめとするヨーロッパ大陸、セイロン、オーストラリア、アメリカ大陸などを放浪することになる。長編小説『虹』(*The Rainbow*, 1915) は樂園喪失と新生の新約聖書の構造を象徴的手法で描くことによって、男女の「愛の弁証法」を表明した傑作である。

大戦中に書き始められていた長編小説『恋する女たち』(*Women in Love*, 1920) は1920年によくアメリカで出版される。これには第一次世界大戦をはじめとする社会的な激動による人間性の破壊、産業資本主義による人間性の疎外、人間性の滅亡と再生の可能性、男女の創造的な新しい関係性などが描かれている。ロレンスはこの代表作をいわゆるイーグルトンの言う「閉じた象徴体系」を駆使し、共時的、通時的な構造化をはかり、新しい手法で描いている。

1920年にシチリア島のタオルミーナに移り、2年の間に詩集『鳥と獣と花』(*Birds, Beasts and Flowers*, 1923)、紀行文『海とサルデーニャ』(*Sea and Sardinia*, 1921)、長編小説『アーロンの杖』(*Aaron's Rod*, 1922)などを出版する。その後、オーストラリア、アメリカ、メキシコ、イタリアなどを転々とする。1926年、ロレンス夫妻はイタリア、フィレンツェのヴィラ・ミレンダに滞在して、紀行文『エトルリアの故地』(*Etruscan Places*, 1932)などの作品、さらに、最後の長編小説『チャタレー卿夫人の恋人』(*Lady Chatterley's Lover*, 1928)を書き始める。この長編は『恋する女たち』における男女の創造的な関係という主題を引き継ぎ、神話的な表象を提示することによって、普遍的な愛について描いている。小説の手法には『恋する女たち』と同様に、通時的であるのと同時に共時的な構造体系である「閉じた象徴体系」というモダニズムの手法が看取できる。「閉じた象徴体系」は歴史的現実を包摂しながら同時に共時的な構造を持つ象徴表現である。1928年には最後の長編小説『チャタレー卿夫人の恋人』の最終草稿が脱稿される。

20世紀英文学の巨匠たちの一人であるロレンスは、フリーダ (Frieda Lawrence, 1879-1956)に見守られて、1930年3月2日、南フランス、ヴァンスの山荘で44歳の若さで永眠する。

(染谷 昌弘)